

花咲き山

令和2年度
飯豊町立飯豊中学校
第1学年だより
第17号
2020.7.21
文責：小松正義



学年だより「花咲き山」は、絵本「花さき山」から頂きました。
作：斎藤 隆介 絵：滝平 二郎 出版社：岩崎書店 の絵本
です。知っている方もいるのではないかと思います。あやのように
自分の花を咲かせられるようになってほしい。自分以外の人のこと
を考えられるようになってほしい。という思いからです。
子どもたちに読み聞かせたいと思っていましたが、その時間も取
れないままに、時間が過ぎてしまいました。ぜひ物語をお子さんと一
緒に読んでみてください。町図書館に絵本があります。絵本でお読
みください。

おどろくんでない。おらは この山に ひとりで すんでいる ばばだ。
山ンばと いうものも おる。山ンばは、わるさを すると いうものも おるが、
それは うそだ。おらは なんにもしない。
おくびょうな やつが、山ンなかで しらがの おらを みて かってに あわてる。
そしては べんとうを わすれたり、あわてて 谷さ おちたり、
それが みんな おらの せいになる。
あや。おまえは たった十の おなゴわらしだども、しっかりもんだから、
おらなんど おっかなくはねえべ。
ああ、おらは、なんでも しってる。
おまえの なまえも、おまえが なして こんな おくまで のぼって きたかも。
もうじき 祭りで、祭りの ごっつおうの 煮しめの 山菜を とりに きたんだべ。
ふき、わらび、みず、ぜんまい。
あいつを あぶらげと いっしょに 煮ると うめえからなァ。
ところが おまえ、おくへ おくへと きすぎて、みちに まよって
この山さ はいってしまった。したらば、ここに こんなにいちめんの花。
いままで みたこともねえ 花が さいているので、
ドデンしてるんだべ。な、あたったべ。
この花が、なして こんなに きれいだか、 なして こうしてさくのだか、
そのわけを、あや、おめえは しらねえべ。それは こうした わけだしゃ……。
この花は、ふもとの 村のにんげんが、やさしいことを ひとつすると ひとつさく。
あや、おまえのあしもと さいている 赤い花、
それは おまえが きのう さかせた 花だ。
きのう、いもうどの そよが、
「おらサも、みんなのように 祭りの 赤い べべ かってけれ」

って、あしを ドデバタして ないて おっかあを こまらせたとき、おまえはいったべ、
「おっかあ おらは いらねえから、そよさ、かってやれ」
そう いったとき、その花が さいた。
おまえは いえがびんぼうで、ふたりに 祭り着を かって もらえねえことを
してたから、じぶんは しんぼうした。
おっかあは、どんなに たすかったか！ そよはどんなによろこんだか！
おまえは せつなかつたべ。だども、この 赤い花が さいた。
この 赤い花は、どんな 祭り着の 花もようよりも きれいだべ。
ここの 花は みんな こうして さく。
ソレ そこに、つゆを のせて さきかけて きた ちいさい 青い花が あるべ。
それは ちっぽけな、ふたごの あかんぼうの うえの子のほうが、
いま さかせているものだ。
きょうだい といっても、おんなしときの わずかな あとさきで うまれたものが、
じぶんは あんちゃんだと おもって じっと しんぼう している。
おとうとは、おっかあの かたっぽうの おっばいを ウクンウクンと のみながら、
もう かたほうの おっばいも かたっぽうの手で いじくって いて はなさない。
うえの子は それを じっと みて あんちゃんだから しんぼう している。
目に いっぱい なみだを ためて……。その なみだが そのつゆだ。
この 花さき山 いちめんの 花は、みんな こうして さいたんだ。
つらいのを しんぼうして、じぶんことより ひとのことを おもって
なみだを いっぱい ためて しんぼうすると、その やさしさと、けなげさが、
こうして 花になって、さきだすのだ。花ばかりではねえ。
この 山だって、この むこうの みねつづきの 山だって、ひとりずつの おとこが、
いのちを すてて やさしいことを したときに うまれたんだ。
この 山は 八郎っていう 山おとこが、八郎潟に しずんで 高波を ふせいで
村を まもったときに うまれた。
あっちの 山は、三コっていう 大おとこが、山かじに なったオイダラ山サ かぶさって、
村や 林が もえるのを ふせいで やけしんだときに できたのだ。
やさしいことを すれば 花がさく。いのちを かけて すれば 山が うまれる。
うそでは ない、ほんとうの ことだ…。
あやは、山から かえって、おとうや おっかあや、みんなに
山ンばから さいた この はなしを した。
しかし、だァれも わらって ほんとうには しなかった。
「山サいって、ゆめでも みてきたんだべ」
「きつねに ばかされたんでねえか。そんな 山や 花はみたこともねえ」
みんな そういった。
そこで あやは、また ひとりで 山へ いったみた。
しかし、こんどは 山ンばには あわなかったし、あの 花も みななかったし、
花さき山も みつからなかった。
けれども あやは、そのあと ときどき、
「あっ！いま花さき山で、おらの 花が さいてるな」って おもうことが あった。

